

国際応用地質学会 (IAEG) の 2016 年総会 (Council Meeting) 報告

副会長 茶石貴夫
国際委員長 伊藤久敏

1. はじめに

国際応用地質学会 (IAEG) の総会 (Council Meeting) が, 2016 年 8 月 28 日に南アフリカのケープタウンで実施されたので以下に概要を報告する. なお, 今回は, IGC (International Geological Congress) 開催に合わせて, ケープタウンで実施されたものである. 日本からは茶石, 伊藤の他, 副会長の木方建造の三名が参加した.



Council Meeting の様子

2. 会長からの報告

Scott Burns 会長から以下の報告があった.

•New national Group

しばらく IAEG 参加国の数は減少していたが, 今年からマレーシア, モザンビーク, エジプト, ネパール, ナイジェリア, タンザニア, アルジェリア, チュニジア, パラグアイ, メキシコが加わる見通しとなった.

•Meeting in London

5 月の末にロンドンで役員会を開き, 多くの課題について二日間打合せを行った. 議論の末, 会費の改定と会誌の電子化に向けたスケジュールを概ね固めた. また, 各技術委員会の機能改善策について提案を行った.

•Two winners of our big awards

Hans Cloos 賞と Marcel Arnould 賞の投票をし, Hans Cloos 賞はトルコの Resat Ulusay

氏に, Marcel Arnould 賞はイタリアの Giorgio Lolino 氏に決定した.

•Congress in 2018 in San Francisco

2018 年の第 13 回 IAEG サンフランシスコ会議の HP は今年の 10 月にはスタートできる. 本会議は, 2018 年 9 月 18 日から 22 日の 5 日間の予定で, 中日には日帰りの巡検を計画している. 会議には 40 以上の数のセッションと, 会議前後には巡検が用意される予定である.

•IAEG Connector

まもなく, IAEG コネクターと呼ぶ世界中の応用地質学ニュースなどを知らせる電子 News letter が二週ごとに会員に発信される. 広告料があるためコストはかからない. 現在, 送付する会員のデータベースを作っており, 具体的な準備を行っている.

•National Groups remember

次の総会は 2017 年の秋にネパールのカトマンズで開催予定である. サンフランシスコの会議に向けて各国から名誉会員を募集するので, この 2 年の間に推薦してほしい. 2022 年の第 14 回 IAEG 大会の開催地は 2017 年の総会で誘致希望を受け付け, 2018 年のサンフランシスコの総会で決定することになる. スポンサーを希望するならば来年には準備を始めてほしい. また, Hans Cloos 賞への応募なども期待している.

3. 事務局長から報告

Faquan Wu 事務局長から以下の報告があった.

•2016 年の会員状況

情報提出依頼に対して, 8 月 7 日までに 57 カ国のうち 29 カ国から回答があった. 会員数は 3,887 名, うち会誌あり 1,717 名, 会誌なし 2,118 名と 20 の賛助会員である. 2015 年に比べて 14 カ国で 253 名増えたが, 13 カ国で 118 名減少している. 中国 592, ドイツ 532, ニュージーランド 381, オーストラリア 281, USA276 が大きなグループである. 6 年間応答なしが 5 カ国, 5 年間で 2 カ国, 4 年間で 2 カ国となっている.

•Newsletter of 2016 New Version

2016 年の Newsletter を一新し, 各国メンバーに配信するとともに website にアップした. IAEG の窓口として, 常に各国グループや Commission からイベントなどの情報を集める努力をしているので協力をお願いしたい.

•2016 Online Survey Report

会誌の配布状況と, 2016 年における最も関心がある応用地質学分野と IAEG への提言, をテーマに 2015 年の末からオンライン調査を行った. 会誌については 22 カ国から 44 の返信があり, 関心分野と提言については 19 カ国から 43 の返信があった. 関心分野と提言については, 内容が大きく五つに分けられる. 最大関心分野, 技術継承(人財育成), IAEG の管理運営, 会員サービス, オンライン調査への意見である. 最大関心分野のトップは昨年に続き, 「地球温暖化」と「自然災害とその対策」であった. 技術継承(人材育成), IAEG の管理運営, 会員サービスに関する提言については, 具体的で有益であり将来の会員サービスや学会運営の改善を検討するうえで大

いに役立つものである。次回の調査は 2016 年の末の予定であり、より多くの積極的な意見を期待している。

• IUGS Executive Committee Meeting

1月18-19日に中国の Kunming で開催された第69回 IUGS 役員会に出席し IAEG の組織や活動を紹介するなどのプレゼンを行った。

• Preparation for the Council Meeting

各国の活動報告については、28カ国から回答があり27カ国からレポートが提出された。Commission については、14の会が活発に活動し12の会からレポートが提出された。

• Establishment of New National Groups

役員会の努力によってアフリカから6カ国の新しい加入があった。アルジェリア、エジプト、モザンビーク、ナイジェリア、スーダン、チュニジアが今年 IAEG に加わった。ヨーロッパではキプロスが復活し、ノルウェーも復活の見通しである。アジアでは、マレーシアとネパールが復活しており、2017年には両国ともに重要な会議を開催する。ネパールは第11回アジア地域会議の開催を、マレーシアは Engineering Geology for Urban Sustainability の国際会議を予定している。南アメリカでは、パラグアイが活動を復活した。北アメリカでは、副会長の Jeffrey Keaton がメキシコ代表にコンタクトし、IAEG への復活を促している。回答がなく会費の3年以上支払いがない国がヨーロッパで6カ国、南アメリカで1カ国、そのほかに3年以上支払いがない国が7カ国あるが、副会長を中心にさらにコンタクトをしていくことになった。

4. IAEG 副会長からの報告

(1) アフリカ

南アフリカが最も活動的なグループである。アルジェリアとナイジェリアが IAEG に新しく加わった。北部アフリカについてはヨーロッパの副会長の力添えによるところが大きい。モザンビークが可能性を持っており、来年早期に訪問して協議するつもりである。タンザニアにも大いに可能性があり、本年末～来年にかけて訪問してみるつもり。ザンビアやボツワナ、ジンバブエはごく少人数である。

(2) アジア

マレーシアを訪問し、ネパールとも非公式の協議を行った。メンバーが100人規模で増えたことは喜ばしい。また、中国、インド、イラン、日本、韓国、マレーシア、ネパール、シンガポールから活動報告が提出された。

(3) オーストララシア

オーストラリアとニュージーランドのみで構成される。オーストラリアの会員数は280人で約半数が会誌あり、ニュージーランドは387人で43%が会誌ありとなっている。

(4) 北アメリカ

副会長の Jeffrey Keaton は、第3回北アメリカ地すべりシンポジウムを IAEG の後援とすることを望んだ。会議は2017年の6月4-8日にバージニア州で開催される。SME

Sustainability シンポジウム&ワークショップは、タイトルが Engineering Solutions for Sustainability で2017年の2月18-19日にデンバーで開催される。これについても後援することになった。

(5) 南アメリカ

アルゼンチン、ブラジル、コロンビア、パラグアイが参加国であるが、ペルーからは回答がない。

5. 会計報告

2014年の収支は50K€の赤字であり、その主な原因は2014IAEG Congressにおける50周年記念bookの印刷及びその増刷を行ったことによることが再度説明された。2016年～2018年の収支計画については、毎年度10～25K€の赤字見込みであるが会員数の増加を期待している。なお、会計残高は約400K€程度となっている。

6. IAEG Strategy

検討を担当したオーストラリアの Mark Eggers 副会長から報告がなされた。IAEGの戦略について、その役割やビジョンについて検討してきた結果として、Vision と Mission および Objectives の案を示した。Phase1として2016年はビジョンとミッション、オブジェクティブを明確にし、2017年はPhase2としてゴールとアクションを目指すといった説明がなされた。Vision と Mission の案については、両者の関係の整合について、及び Environment についても含めるよう指摘があった。IAEGには中～長期計画が必要で、規則の改定、Strategic Planning(戦略計画)委員会、Enterprise(事業企画)委員会、若手委員会などの立上げが必要と考えられる。

7. Report of The Bulletin Editor in Chief

Martin Culshaw 編集委員長より以下の報告があった。

(1) 会誌の状況

2015年と2016年前期の投稿数は、中国372件、イラン162件、トルコ105件と、これら3カ国だけで60%以上を占めている。現在、Editorial Boardのメンバーは全部で65名、うち中国15名、UK10名、トルコ6名、イタリア5名となっている。人数としては間に合っていると言える。投稿論文のうちRejectの割合が約70%に達しており、その原因は投稿数が多すぎて他の学会誌に比べて質が低いためではないかと思われる。BulletinのImpact Factorは次第に高くなってきており、2010年～2014年には0.6～0.8であったが、2015年はなんと1.252に上がった。Martin Culshawは2012年の10月からこの任に就き、2017年で5年になる。ついては、2018年までで退任したい。提案として、2018年からはWong Louis (Hong Kong)との二人体制とし、2019年からはトルコのResat UlusayにChiefを交代するとの考えが出され承認された。

(2) BulletinのOn-lineへの移行

会費の金額と先進国と途上国の評価について集中議論してきた結果が報告され

た. Springer による会誌は 2017 年から完全に電子化することも可能であるが, 完全に電子化するまでに 3 年間の移行期間を設けること(2019 年に完全電子化)を提案し承認された. それに伴い, 会誌の印刷費が不要となるため年間の会費を約 13€ 少なくすることができる. 会費は World Bank(2016 年)による high-income の国とそれ以外の国に区分し, 前者は Full fee countries, 後者は reduced fee countries とする. 新しい会費は 2019 年からの適用になるが, with bulletin で 25€ 程度になると思われる.

8. Richard Wolters 賞(RWP)

中国から 2 名とロシアから 1 名の応募があり, プレゼンの結果, 中国の Xuanmei Fan に受賞が決まった. 8 月 31 日にセレモニーがありメダルが授与された. 今回, 応募が 3 名しかなかったことから現在の応募資格 35 歳までを 40 歳までにすべきとの議論がある.

9. IAEG sponsored meeting

・第 11 回 IAEG アジア地域会議(ARC-11)

Ranjan Kumar Dahal から会議の計画状況についてリーフレットの配布とともに説明があった. 会議は 2017 年の 11 月 28~31 日で, 巡検が 11 月 27 日と 12 月 1 日~3 日で計画されている. 主なテーマは, Engineering geology for Geodisaster management となっている.

その他, 以下の会議が紹介された.

・International Symposium, Marine Engineering Geology, Qingdao, China

2016 年 10 月 21-24 日

・IAEG Congress 2018 in USA 2018 年 9 月 18 日-22 日, サンフランシスコ

・3rd North American Symposium on Landslides 2017 年 6 月 4-8 日, Virginia

・SME sustainability symposium & workshop 2017 年 2 月 18-19 日, Denver

・Shaoxing Intl. Forum on Rock Mech. & EG, 2017 年 10 月末, Shaoxing, China

10. 感想および今後の展望

今年の総会は第 35 回 IGC 大会に合わせて開催されたが, これは 2014 年のトリノの総会で決まったことであり, 2004 年にフィレンツェで開催された第 32 回 IGC 大会以来である. アメリカの Scott Burns が会長になってから 2 年目になるが, 13 名の役員は活動的で, 特に, 最近の IAEG 大会の開催地のメンバーが重要な役割を担っている. 第 10 回の UK での IAEG 大会を仕切った Martin Culshaw が Bulletin の編集責任者を続け, 第 11 回を主導したニュージーランドの Ann Williams はオーストラリアの存在感を高めている. 第 12 回のイタリアでは代表の Giorgio Lolino を中心に website の質をずい分向上させている. 日本からは 4 年連続で総会に出席し存在感を示せていると思われるが, アジア地域会議への支援や IAEG への情報発信などを精力的に行う必要がある.

現在の IAEG 会員数は 4,000 人弱で 7, 8 年前と変わらない。中国や USA, オーストラシアで激増したにも関わらず変わらないのは、主に北部ヨーロッパの国々が脱落または減少したことによるもので、その国の学会そのものに問題が生じたのではないかと思われる。地質・地盤系の国内学会員の一部が IAEG 会員になっているという事情はどこの国でも同様であり、IAEG のビジョンやミッションを明確にしてその独立性を示し、会員のアクションに繋げようということが役員会や総会で議論されている。日本の IAEG 会員数も 7, 8 年前から 6 割ほどに減少しており、国際会議への参加奨励や情報発信をより密に行っていく必要がある。

Bulletin への投稿は、中国、イラン、トルコで全体の 6 割以上を占めており、会員数から見ると約半数の会員が投稿していることになる。日本からの投稿は極めて少なく、会誌の Impact Factor も高くなってきていることから、もっと活用することが望まれる。総会では、昨年 of 京都に続いて来年 11 月にカトマンズで開催される第 11 回 IAEG アジア地域会議(アジアシンポジウム)の計画が発表された。防災が主要テーマであり、日本の事例や研究を発表するとともに、ヒマラヤ地域の地形や地質を目にする絶好の機会である。また、2018 年にはサンフランシスコで第 13 回 IAEG 大会が開催される。若手をはじめ多くの方々が参加や発表を今から計画されることを期待している。